


DOJIN
R18
成人向け

ほお
ぞせ
ほけ
ぞは
に〜







「おさけはほどほどに！」

- ・「おさけはほどほどに！」 るね……………P3
- ・「残月」 黒姫工リナ ……………P26

おーい狐エ

また肝試し対決
やろうぜえ。



…ハア？



今度あ、
決着つけようってんだよ。



ほら、この前の飲み比べ
嬢ちゃんの暴走でうやむやに
なっちゃまったじゃねえか。



誰がやるかよ。
お前のことだから
ロクな事考えてそうだし。



俺は忙しいんだよ!
大体こんな真昼間から
酒飲んでられるか!!

ええー
暇だし付き合えよー



ただ勝ち負けじゃ
つまんねえから
狐が負けたら
女体化し...

貴様俺の話
聞いていたか...?



ああすまんすまん
じいさんには
ちと重荷が過ぎたな。

そうこなくうちやねー

誰か年増たこら
おうやってやろしや
ねえか酒豪村決

30分後...



どうだ？

なっ？！

今日だけ
特別だからなっ

うおおおおおま
女体化キター！

オオオ

オオオ

ウフフ

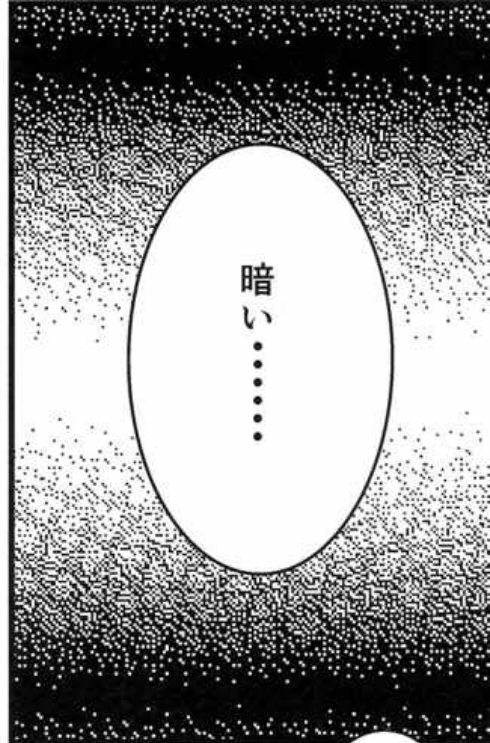
ウフフ





——昔の俺だ。

……あれは……



暗い……



——お前もおいていかれたのか？



——今何て……



……え

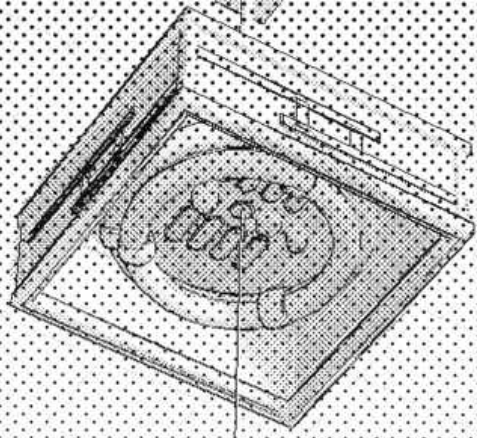
泣いているのか？



——ッ！

随分昔の夢だったな……

……夢。



そうだ……
信楽と酒飲んで
勢いで女体化
したんだっけ……

……信楽？



こんなに飲んだの
久しぶりだから
まだ身体熱いな……



なあ返事しろよっ

淫獣

信楽



信楽っ

エロ狸 10

——まどか



——昔、似たような事があった
2人で酒飲んで笑い合ったのに
目が覚めるとお前はまるで
煙のように居なくなっているんだ



.....
嫌だ。

——信楽、
また俺をおいて行ったのか？



俺とずっと一緒にいるって
言ってたじゃねーか！

信楽っ.....!!





どうしたんだよ狐

もう何処にも行くなよっ

ぎゃう

約束したじゃねエか。
お前さんおいてもう
何処にも行かねエよ。

おじさん勃って
きちゃったんだけど……
あっぱい
モロ当たってる。

ん……

——この大きくて暖かい手が好きだ。

……狐、あのさ。

こんな時で
悪いんだが……

おま
おま


……
?>



かあっ...

……

優しくしろよな……



……おじさんのこと
煽ったの後悔するなよ？





♡♡♡、おめ♡♡♡
♡♡♡、おめ♡♡♡

♡♡♡、おめ♡♡♡
♡♡♡、おめ♡♡♡
♡♡♡、おめ♡♡♡



やっ…あつ…あつ…
そんな揉むなあつ…

狐ってホント
おっぱいデケーよな。
超ヤラゲー。





おじさんもう本気だから
覚悟はいいな狐.....

は.....あ.....



んやっ

そろそろこっちの方も
弄ってやるよ

ここは物欲しそうに
ぱくぱくしてるぜ。

やあああ……

狐……挿れるぞ。

のの
あ♡

ヤ
たっ♡
たっ♡
めっ♡

クク

のの
あ……



ただいまなのです。

ガラ

おう！
嬢ちゃんおかえりー

あれ……？
コックリさんは
お買い物でせうか。

？

狐なら
酔っぱらって
寝込んでるぜ

なんと。
お昼からお酒飲みとは
コックリさんもおじさん
のこと言えないのです。

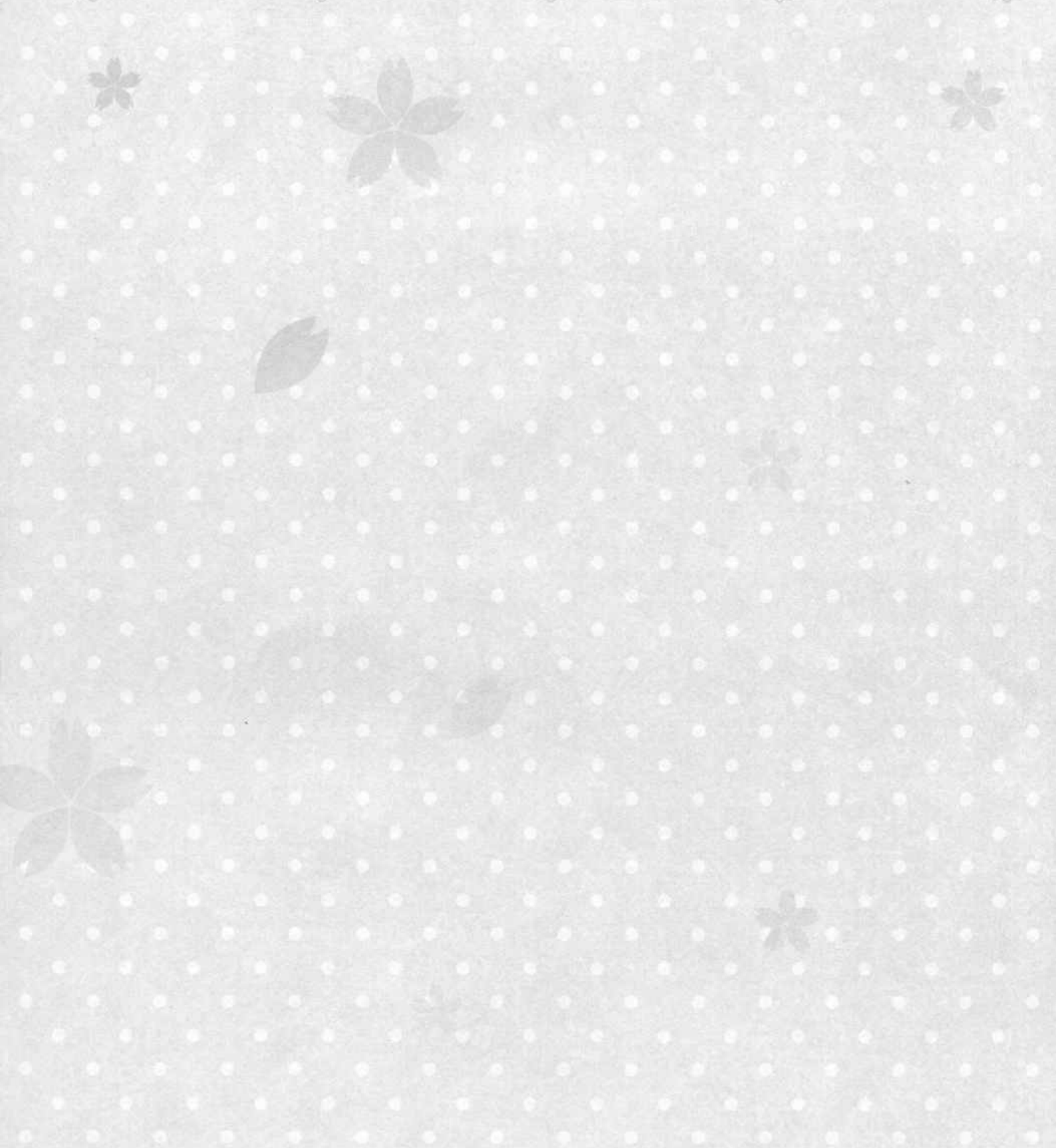
ケツ
酔っぱらい共め。
我が君に近づくなで
ございます。

あの分だと
腰も痛めてるだろうから
夕飯は適当に食おうぜ。

ヤリ過ぎました☆

狸め……
覚えておけよ……
うう……

腰……？
まあそれはどうでも
いいとしてカブメン
祭りなのです！



残月

黒姫エリナ

まるで幻のように、開け放した窓枠に肘をつく、その後ろ姿を見ていた。煙管から吐き出された細い煙が、月の光を弾く長い髪にまとわりついている。

……最初は何だったか。いつものように失恋してヤケ酒をあおり、お前も付き合えと狐を誘い、無理矢理酒盛りをしていた。まめで世話焼きのそいつを見て、ふとお前が女だったらなあと呟いた。

仕方ないなど呟いた狐は、女の姿に変化した。

いいのか？と手を引き寄せて、唇を奪った。その後の事は良く覚えていない。手に吸い付くような肌理の細かい肌

も、恥じらう顔も、かわいらしい悲鳴も、すべて夢だった気がする。ひよっとして化かされたのかもしれない。

遠い昔、こいつは人間の男と添い遂げるために、女の姿をしていた事がある。

「起きたのか？信楽」

振り向いたヤツの声を聴いても確信が持てず、乱暴に肩を掴むと、羽織っていた単衣が落ちた。

後悔した。やわらかい白い肌に、自分の残した痣がいくつも刻まれていた。それをかけなおして背後から抱きしめると、あきらかに男の身体ではなかった。

「よっぽど良い女だったんだなあ。お前がそれほど入れ込むとは」

「ああそうだな」

お前ほどじゃないが。

「まだ飲むか？」

「いや、いい」

そいつを抱いたままごろりと横になると、大人しく従う。驚くほど軽い身体を自分の上に引き寄せ、顎に手をかけてついでに唇を重ねる。

「……何でだ？」

問いかけると、かわいらしい声で曖昧に笑う。

「さあ？何故かな」

信楽の顔に手を伸ばし、右目の傷をなぞった。

「月のせいででもしておくか」

「それが良いな」

毎度のことながら狸が女に振られ、酒を飲みながら延々

と愚痴を垂れ流しているの、片付けが一向に進まない。風呂から上がった後もまだ飲んでいたので、あきれて盃を取り上げた。

「すげえ別嬪さんだったんだよう」

「だから振られたんだろう。身の程をわきまえろ」

相手をするのも面倒になって、これ以上飲ませてたまるかと自分も飲み始めた。愚痴を聞きながら夜中も過ぎた頃、したたかに酔っぱらったあいつが抱きついてきた。

「離せ。狸じい」

「つれないなあ、狐よう」

信楽はわざとらしく泣きまねをしている。

「ああ。ホントにお前が女だったらなあ」

何度目かのその台詞を聞いた時、俺の中で何かが動いた。その後の事は良く覚えていない。頬に触れる大きな手が思いがけずあつたかいなとかそんな事。

信楽が何やら呟くと、鈴がひとりでにほどけて落ちた。

女に変化した後、どうしても顔を上げられずにいると、手を引かれて唇が重なった。背後から抱きしめられ、女になった分ゆるんだ懐に右手が忍び込んだ。髪をわけてうなじが晒されると、何度も甘噛みされる。

「相変わらず、綺麗な白い肌だなあ」

「……ちよ、耳にかみつくな」

胸元に忍び込んだ手の平がその重みを確かめるように滑る。

「……あつ」

やわらかく揉んでいたその指先が突起をつまみ、何度も力を加える。

「やつ」

「色っぽい声だな」

裾を割って忍び込んだ手が太腿を撫で上げ、徐々に上方へ。

「あ……」

信楽は狐を横たえ自分の着物を脱ぎ捨てると、帯に手をかけた。

「逃げるなら今だぜ？」

恥ずかしくはあつたが、不思議と怖くはない。答えない唇に今度は深く重ねられる。

唇をむさぼられている間に、着物の前がはだけられた。風呂上がりの火照った肌に夜の空気が冷たく、奴の手の熱さが染みた。

「……明かりを消してくれ」

窓からの星明かりだけになり、信楽が首筋に舌を這わせた。

「ん……」

背中に手を回すと、そういえばこいつと肌を合わせるのは初めてではなかった事を思い出した。遠い記憶だ。まだ都で暴れまわっていた頃。

足首をつかまれ膝を折られると、奴は指を一舐めし、足の間忍ばせた。立てた膝から太腿を伝い、奴の指が茂みに辿り着いた。不安定な身体を揺ると、指先が花卉を捕らえて、中心に電流が走った。

「こっちはどうだ？」

「ひっ…あ、いたっ…痛い」

「まだ早ええか」

両足を肩にかつがれ、狐は狼狽した。

「……何をする気だ」

「指じゃ痛えだろう」

「だけど……やっ」

「心配すんな。気持ち良くしてやるよ」

「ひゃ」

顔を埋め込まれ身体を揺すったが、びくともしない。吐息がかかり、唇が触れた。

「あっ」

舌先が真珠に触れ、軽く吸い上げると、身体中が震えた。「やっ…声が…」

「大丈夫だ。嬢ちゃんは起きやしねえよ」

「ああつ」

今の自分の姿を想像しただけで、身体中がかつと熱くなつた。信楽は、白い内腿を舐め上げ小刻みに歯を立てる。

自分が一体何をされているのか判らぬまま、きつく目を閉じて、指先がすがるもののない空間を彷徨う。突然、身体中が抑えようもなく震え、長い絶頂を味わった。初めての経験だった。

「……っ」

苦しい息の中で目を開けると涙がこぼれ、自分の足の間から信楽がゆらりと身を起こした。

口元をぬぐい、獲物を追い詰めるような鋭い視線を自分に向けるそれは、まぎれもない雄のものだった。人の姿を

しているが、こいつはまごうことなき獣だ。そして自分も

……。

「気持ち良かったか？」

いつもの軽い口調だが、答えるのは癩に障る。腕を掴まれたかと思うと、畳に両手と両膝をつかされた。背中から覆われると、奴が耳元でささやいた。

「ああいうのは初めてだったかい？お嬢ちゃん」

「つるっさい！そんな風に呼ぶな！」

脇から回された手が、乱暴に胸を揉みしだいた。

「…やっ！」

「どこからどう見たって女じゃねえか、なあ？」

腰を強く引き寄せられたかと思うと、そのまま貫かれた。忘れていた衝撃が体内を何度か駆け抜け、そのまま奥まで。

「あつ……あ」

「ここも……女だ」

「ああっ……あんっ」

信楽が腰を動かすたびに声が漏れた。太腿を撫でている手がぬるりと滑り、更に足を開かせた。こんな風に抱かれていたのはいつの事だったか。

髪を撫でられた時に、ふいに名前を呼ばれた。

おしの

志野、志乃、篠乃……たくさんあった自分の名前。

「…お……」

お前さま！

叫びは声にならなかった。もう顔すら思い出せない自分の良人。風のように早く通り過ぎて行ってしまった。自分を抱いているこの男は一体誰なのか。

涙があふれた。

「…しがらき……信楽！」

鳴き声まじりに呼ぶその声に、信楽は動きを止めて問うた。

「どうした？」

「顔を……」

それだけでわかったのか、彼は狐を離し、向かい合わせに抱き上げた。

「お前はけっこうさびしがり屋だよな」

顎に手をかけて頬の涙を舐める。

「そして情が深い」

信楽が狐の豊かな胸に顔を埋めると、髪が揺れて白い喉元を晒した。

「ふっ……あ」

再び貫かれて、狐の手が首にしがみついた。肌を吸い上げ噛みつかれる度に、自分の中がじわりと反応し、信楽を締め付けた。時折揺すり上げられると、たまらなく感じる。たった一つ残されていた足袋が、畳の上をこする。

「ああっ……」

そのまま背後に倒され、信楽が乗り上げる。両足を抱えなおす彼に狐は手を差し伸べた。

「……ぎゅっとして」

「ああ」

信楽は狐を抱きしめたまま、激しく動いた。背中に爪を

立てられてもかまわなかった。

「んっ……はっ」

「ああ。気持ち良いなあ」

「熱い……信楽……しがら……き……」

耳に心地よいその声を聞きながら、狐の体内に放った。高い悲鳴を上げながら白い肢体がしばらく震えたかと思うと、糸が切れるように気を失った。

夜目にも鮮やかな白い髪と金の瞳。

魅了されなかったといえは嘘になる。かつて宮中に入り込み帝を操っていた尾が二つの白狐。捕まえるのには相当手こずった。

腕の中に抱き込んだその顔を見つめっていると、あの時ぎらぎらと目を光らせていた狐とはまるで別人のように思える。界緒で縛り上げられ、呪符で封じられていたそれを逃がしたのは自分だ。

何故かはわからない。

「寂しいとわかって、お前はまだ人間と関わろうとするんだな」

顎に手をかけて、頬に口づける。

「まあ、おじさんも長生きだからな。できるだけお前さんのそばにいてやるよ」

了



こまこま
で読んで下さる
ありがとうございます
ございました♡
こまこま

なつた

16年4月26日
持筆屋のなつた

こんにちは るねです。
この本を手にとって下さりありがとうございます。
ググコクはアニメからハマったのですが、
まさか本作るまでハマるとは思いませんでした…w
今回はよたエロ本ですが狸狐も普通に好きです。

ただのエロ本にするつもりが無駄にシリアス入りました。
でも狸狐描いててすごく楽しかったです！

また次回機会がありましたら…

<おさけはほどほどに！>

繰繰れ！コックリさん
信楽×コックリさん
シノメ るね
2015/2/8発行

Special Thanks 黒姫エリナ様

Twitter ru_ne
Pixiv 736359

印刷 株式会社栄光様

ブブネ!ゴツフリさんFANBOOK

信楽×ゴツフリさん

